

筑波大学新聞

第317号

編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福田直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail: shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1-1-1

紙面から

下田センター	下村氏 特別招聘教授に	2
附属図書館企画展	貴重な書籍展示	5
サッカー	今季初連勝で10位浮上	8
野球部	リーグ優勝逃す	9
男子バス部	ファン交流イベント好評	10
人工衛星「結」	2号機打ち上げへ	11

ミニ特集
国立大学から「文系」が消える？

特集
筑波大生の44%が
授業中のスマホ「制限すべきでない」

授業中のスマホ

学生約9割が使用

本紙調査

学生の74%が授業中「授業に無関係の用途」でスマホを使用し、うち67%がその使用に「罪悪感」を感じている……。10月に本紙が筑波大学360人、東京の5大学269人に行ったアンケート調査で、こんな結果が明らかになった。一方、筑波大教員33人への調査では、授業中の使用について70%が「一部」または「全面的」に認める、と回答。恒常化した授業中のスマホ使用に学生が罪悪感を感じる一方、それが「市民権」を得始めていることも判明した。(新田明夏Ⅱ社会学類2年、大西美雨Ⅱ同1年、6、7面に関連特集)

教員は7割が「認める」

調査は10月、筑波大のほか、青山学院、慶應義塾、上智、一橋、法政の各大学で実施。他大学では学生が授業中のスマホ使用に罪悪感を感じ、授業中のスマホ使用率は全大学で87%に上った。一方、「無使用」は全大学で7%だった。また、授業に無関係の用途でスマホを使用した学生のうち、「罪悪感を感じた」のは筑波大が69%、他大生が65%。授業に無関係の用途で使用した学生のうち、「無使用」は全大学で7%だった。

うちでも、筑波大で66%、他大学で75%が「罪悪感を感じた」と回答している。アンケートによると、「授業に無関係の用途」でスマホ使用の学生のほとんどがツイッターやLINEなどのSNSを使用。これらの学生からは大学生だから「判断力もあり」一律に制限すべきではない、「それぞれの授業の教員が(スマホの使用の可否を)決めるべきだ」といった意見が多かった。



「また帰っておいで」 下田でウミガメふ化

筑波大学下田臨海実験センター(静岡県下田市)

と分かり、自転車は持ち主の手に戻った。また今年7月にも学内で見つかった放置自転車の所有者が同様に特定され、返還されたが、これも盗難自転車だった。同課によると、制度導入後、同様に盗難自転車が持ち主に返された例は約30件。これとは別に、つくば駅周辺などで同市やつくば中央署が回収した放置自転車も、タグがある場合は、市などが大学に連絡。今年度だけですでに20件の持ち主が特定され、一部が返還された。放置自転車の一部は盗難された可能性がある。一方、同課によると、今年4～9月の学内の自転車盗難の件数は43件で、前年の同時期(11件)の約4倍。これについて同課は「ICタグの導入で発見される可能性が高まった」とみて、被害者が積極的に届け出始めたのではないかと分析している。(鈴木拓也Ⅱ人文学類3年、11面に関連記事)

盗難自転車持ち主に返還

自転車・バイク 登録制度 ICタグで特定

筑波大学が昨年10月に導入した自転車・バイク登録制度で、自転車に装着したICタグが奏功し、盗難自転車が無事持ち主の手に戻った例が30件以上にのぼることがわかった。また、つくば市などが回収した放

と分かり、自転車は持ち主の手に戻った。また今年7月にも学内で見つかった放置自転車の所有者が同様に特定され、返還されたが、これも盗難自転車だった。同課によると、制度導入後、同様に盗難自転車が持ち主に返された例は約30件。これとは別に、つくば駅周辺などで同市やつくば中央署が回収した放置自転車も、タグがある場合は、市などが大学に連絡。今年度だけですでに20件の持ち主が特定され、一部が返還された。放置自転車の一部は盗難された可能性がある。一方、同課によると、今年4～9月の学内の自転車盗難の件数は43件で、前年の同時期(11件)の約4倍。これについて同課は「ICタグの導入で発見される可能性が高まった」とみて、被害者が積極的に届け出始めたのではないかと分析している。(鈴木拓也Ⅱ人文学類3年、11面に関連記事)

び出すと、すでに子ガメ10数匹が波打ち際を目指していた。後ろで見守るのは職員約20人。職員らは9月以来、「砂浜でウミガメが産卵した可能性がある」と話し合っており、待ち望んだ誕生の瞬間だった。和田助教によると、子ガメたちの最初の試練は「波」だった。約20分先の波打ち際まで10分ほどかけて到着しても、押し寄せる波に追い返され、なかなか大海原に漕ぎ出せない……。その奮闘ぶりに職員たちも一喜一憂したという。下田市の下田海中水族館によると、アカウミガメは同市周辺の砂浜などで毎年5～8月ごろ産卵。1回90～130個の卵を産み、約2カ月でふ化する。産卵地の乱開発などで絶滅が危惧されており、和田助教は「今回の産卵地周辺にはイノシシが出没しており、無事にかえってよかった。大海原での無事を祈るだけです」と話していた。

筑波大 人社系存続を明言

文系学部廃止問題

学長インタビュー



人社系の学問の重要性を強調する永田恭介学長 (10月22日、学長応接室で) = 田中開撮影

文系学部の組織は存続する」と明言した。一方で学長は「文科省が今年、国立大学の組織改革案として『人文社会科学系』の学部・大学について、『組織の廃止や、社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきでは』とする改革案を提言。国立大学の在り方を検討する同省の審議会『国立大学法人評価委員会』の議論を受けたもので、提言には強制力はないが、文系の教員が反発するなど、議論を呼んでいた。これに対し永田学長は、人社系の学問の重要性を強調。『研究が社会に何をもたらすか』という即効性ばかりを問う姿勢は改めるべきだ」と文科省の提言に異論を唱えた。学長は「文科省の」改革案では、すぐに成果の出ない研究分野が消えてしまう恐れがある」とし、「今は評価されない研究でも、それが『必要ない』とは限らない。研究が何をもちたらずかに関わらず、オリジナリティーがあれば、学問として支援し、守るのが大学の役割だ」と語った。一方で永田学長は「これまで人社系の教員の多くは、研究成果を必ずしも(世間に)分かる形で、社会に還元してこなかった。教育機関が社会のために貢献することは、教育基本法にも明記されている」とも発言。人社系の教員に意識改革を求めた。この上で学長は「(人社系の)『廃止』はしないが、『改変』は必要だ」と話し、今後の組織改革の必要性に言及。具体的な改革案については、「大学本部の命令で(改変の)方向性を決めるのではなく、人社系の教員自身が改変の方針決定に関与できる体制を整えたい」と語った。(小野憲司Ⅱ社会学類1年、2面に関連記事、3面に関連特集)

筑波おもしろ

半世紀前の東京五輪で、海外メディアに「東洋の魔女」と名付けられた女性たちがいた。日本の女子バレーボールチームだ。五輪では連戦連勝を重ね、最後は宿敵ソ連(当時)を破り見事金メダルを獲得。日本中を熱狂の渦に巻き込んだ▼立役者は、厳しい指導で知られた監督の大松博文だった。異名は「鬼の大松」。選手に「どんな困難にもめげない精神力」「体力の限界を超えるハードトレーニング」を求め、体を壊した選手には練習しながら治せ」と一喝し、鍛え上げた▼そのスパルタ指導は、日本に「根性論」を根付かせるきっかけとなった。我慢すればどんな厳しい状況も打破できる……この考え方は「アタックNo.1」や「巨人の星」などのいわゆる「スポ根」(スポーツ根性)アニメでさらに美化された▼だが近年、根性論が問題視されている。「根性」の名のもとに、学校の部活動では、部員に水分補給を禁じたり、暴力を振るったりする事例が多発。昨年発覚した女子柔道の体罰問題も、指導者側の脳裏には根性論があったのかも知れない▼6年後には再び東京で五輪が開催される。テレビや雑誌では「未来のアスリート特集」が組まれるなど、メダル獲得への期待はかつてないほど高い。だが期待しすぎるあまり、選手に根性論を押し付け、追い込んでほならない。選手への配慮の心を忘れず、応援したい。

下村脩氏が特別招聘教授に



下村脩氏（左）と稲葉一男センター長（右奥）（10月17日、静岡県下田市で）＝下田臨海実験センター提供

下田臨海実験センター

研究機能の拡充進む

筑波大学の海洋研究の拠点、下田臨海実験センター（静岡県下田市）の研究機能の拡充が急速に進んでいる。10月には2008年にノーベル化学賞を受賞した下村脩氏が筑波大の特別招聘教授に就任。一方で3月には最新鋭の調査船「つくばⅡ」が完成。9月には老朽化した研究棟も改修されたことで、今後の研究成果が期待されている。下村氏は、継続的に筑波大の研究活動への助言をしていく予定で、同センター長の稲葉一男教授（生環系）は「下村氏のサポートを受けてながら、（下村氏が提唱する）生物学と化学を融合させた海洋研究をさらに進めていきたい」と話している。（平嶋健人＝社会学類3年、12面に関連写真）

■下村氏、特別招聘教授に就任

10月24日付で就任した下村氏は米在住で、筑波大での研究活動は行わない見込みだ。しかし、来日した際に筑波大で講演を行った。筑波大の生物学や化学分野の研究内容・方針について助言する。また、生物学と化学を融合させた学問分野「ケミカルマリノバイオロジー」の研究グループに所属し、研究へのアドバイスをを行う予定。特別招聘教授の就任に伴い下村氏は10月16・17日、

■新型調査船が完成

老朽化した海洋調査船「つくばⅠ」の後継として造船された「つくばⅡ」が今年3月完成した。つくばⅡは、水深約1500メートルまでの海中・海底の様子をリアルタイムに映し出すことができるロボット「ROV」や、海底の地形を三次元で計測できる探査機を新たに導入。ダイバーが潜水できなかった深海・海底環境の調査が初めて可能となった。海洋生物



寄贈されたブロンズ像「旅へ」と「囀るさん」（10月7日、総合研究棟Aの南側広場で）

86歳の時にバイオテクノロジーに関する研究で博士号を取得した茨城県信用組合会長の嶋谷祐一さん（平成21年度生命環境科学研究科修了）が、ブロンズ像2体と自作の漢詩を刻んだ銘板を筑波大に寄贈した。10月7日に除幕式が行われ、永田恭介学長らが出席した。寄贈されたブロンズ像は、いずれも柴田良貴教授（芸術系）の作品。うち1体は「旅へ（高さ185センチ）と題するもので、総合研究棟Aの南側広場に設置された。

ブロンズ像2体を寄贈

た。女性がこれから社会へ踏み出そうとする様子を表している。もう1体は、芸術学系棟に置かれた「夜の幕をひらく（同184センチ）。「旅へ」のそばには「食を忘れず」という意味を込めた「忘食」という嶋谷さんの漢詩銘文も設置。大学院生時代の思い出が詠み込まれ、学生へのメッセージになっている。

総合研究棟Aの南側広場で行われた式典では、寄贈を受け永田学長から嶋谷さんに感謝状が贈呈された。

LINE 森川氏が講演

「変化への対応が重要」

筑波大学・つくば市・インテル株式会社社長の連携事業「第3回 起業家教育講座」が10月11日、情報メディアユニオンメディアホールで開催された。同講座ではLINE社社長の森川亮氏（昭和63年度情報科学卒業）と経営コンサルタントの本庄修二氏の講演と対談が行われ、会場には学生や社会人など約60人が訪れた。第1部では無料通話・メールアプリ「LINE」のビジネスモデルを森川氏が解説。「将来が予測できない時代なので、先を読むのに時間を使うより、変化にどれだけ対応できるかが重要」と話し、事業計画を作らず、会議も行わない独自の社風を明らかにした。第2部では「なぜ頭のイイ人も新事業で大コケするのか？」をテーマに本庄氏が具体的な事業の失敗例を交えながら、アイデアを事業化する方法などについて説明。本庄氏は「物やサービスが売れる」マーケットを知るにはアンケート調査より、少数の顧客と深く対話することが効果的だ」と語った。

「日本の学生は知識不足」

再任が決定した永田学長に聞く

めまぐるしく変わる世界情勢や社会の価値観に、今後、大学はどう対応していくべきか。来年4月からの再任が決定した永田恭介学長に、今後の任期4年間の抱負などを聞いた。（聞き手・井口彩＝社会学類2年）

■教育方針

筑波大学では現在、学群・学類を超えて授業を履修できるカリキュラムが整備されているが、単に教養としてほかの分野を学ぶだけでは不十分だ。十分に消化し身に付けなければ将来役に立たない。世界では「大学卒業生なら

知っている当然」の知識が、日本の学生には不足している。「自分の専門分野以外知らないという学生も多く、これでは将来、世界で活躍するのは難しい。」

■研究の支援体制

筑波大が日本や世界をリードするような研究を支えてい

きたい。一例が体育系を主とする五輪研究だ。筑波大は日本の五輪教育・研究の中心的存在。他にも筑波大には学問の中心になりうる研究が多くある。そこを伸ばしたい。

また、学生や若手研究者の発想力も大事にしたい。エネルギー問題、少子化問題などさまざまな（現代社会特有の）問題を解決するには発想力と、科学技術が必要。若者の発想力を伸ばす取り組みを積極的にやりたい。

7月に開催されたビジネスコンテスト「Tsukuba Creative Cam

psでは、起業のプロの力を借りて、学生が起業のアイデアを練り上げた。このようなことのほかにも、若者がさまざまな経験をできるようにしていきたい。

「若者の発想力伸ばしたい」



「Tsukuba Creative Camp」では発想力が試された（7月19日、5C棟で）＝平嶋健人撮影

■つくば市との連携

昔から教育機関は街の中心

的な存在だった。今後も市との連携は強化していく。大学が活性化すれば、つくば市も活性化する。つくば市の弱点は、製造業企業の数の少なさだ。筑波大と企業の共同研究を推進し、誘致にも取り組むみたい。

一期生が同窓会 約230人が集まる

筑波大学第一期生全同学窓の集いが10月25日に帝国ホテル東京（千代田区）で行われ、一期生のほか、永田恭介学長や当時の教員など約230人が集まった。応援部WINSの演奏も披露され、出席者は旧友との再会に話を弾ませた。

企画のきっかけは昨年11月に、開学40周年を記念して行われた大学主催の同窓



旧友との再会に笑顔を見せた一期生たち（10月25日、帝国ホテル東京で）

J1鹿島で企業体験 業務サポート行う

筑波大学と鹿島アントラーズFCの連携事業の一環として、10月18日、筑波大の学生80人が鹿島アントラーズで企業体験を行った。招待した鹿嶋市立波野小学校の児童をスタジアムに誘導するなどの業務サポートを行った。参加した高沢元輝さん（社会学2年）は「今までにないような経験ができた。主体的に行動することの難しさを感じた」と話した。

企業体験後にはJリーグ戦、アントラーズ対柏レイソルの試合を観戦。アントラーズが試合観戦に

大きな歓声が上がった。アントラーズとの連携事業を推進している大澤義明教授（シス情系）は「運営側の様子を知ることが学生にとって貴重な経験になったと思う。来年度以降の開催も検討していきたい」と語った。

筑波大とアントラーズは昨年、地域連携・活性化に向けた連携協力に関する協定を締結。大学院の社会工学専攻で、両者が協力し講義を開講するなど連携を強めている。

（森脇慎）

国立大学から「文系」が消える？

今年8月、文部科学省は同省の審議会「国立大学法人評価委員会」の議論を受け、国立大学に組織改革案を提示した。そこに書かれた「教員養成系、人文社会科学系の廃止や社会的要請の高い分野への転換」という文言が波紋を呼んでいる。この改革案で国立大学はどう変わるのか。国立大学から「文系」が消えてしまうのか。有識者や現場の教員、学生の声を聞いた。

(井口彩・小野恵司・林健太郎・山野辺拓実) 社会学類・田中開 教育学類

「社会的要請」論点に

問題となっているのは、付で提示した組織改革案中に「国立大学法人評価委員会」の「教員養成系、人文社会科学系は組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を踏まえた速やかな組織改革が必要ではないか。特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか。

「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」より
2. 組織の見直しに関する視点
○「ミッションの再定義」を踏まえた速やかな組織改革が必要ではないか。特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか。

今回の改革案で議論を呼んだ文言(国立大学法人評価委員会総会(第48回)資料に基づき作成)

今回の改革案で議論を呼んだ文言(国立大学法人評価委員会総会(第48回)資料に基づき作成)

の取締役などから約20人が2年に一度選出される。今回の改革案は、平成28年度から実施される「第3期中期目標」を見据えたもので、8月4日に行われた同委員会の総会で提示された。改革案では各大学に「ミッションの再定義」を踏まえた速やかな組織改革を求めている。教員養成系、人文社会科学系の組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換が必要とされているが、「社会的要請の高い分野」が何かは示されていない。

文科省「文系 国立大に必要」

今回の改革案の真意は何か。文部科学省国立大学戦略室の評価調査係長、赤石巨さんに話を聞いた。赤石さんは「文科省は、国立大に文系が必要なのは考えていない」と明言。改革案の作成理由として「少子化で大学受験者数は減り続けているため、受け入れる学生数を見直す必要がある」と挙げた。また「国立大の役割として(哲学や史学などの)需要の低い学問分野の継承と発

めのもので、法的な拘束力はない。冷静に状況を判断してほしい」と語っている。先導「や」社会の発展への貢献」など抽象的なものが多かったが、今回の再定義で定めたもので、昨年11月に文科省が策定した「国立大学改革プラン」の中で示された。これまで国立大学の役割は「専門的研究の先導」や「社会の発展への貢献」など抽象的なものが多かったが、今回の再定義で定めたもので、昨年11月に文科省が策定した「国立大学改革プラン」の中で示された。

なぜ教員養成系や人文社会科学系に転換が求められているのか。教育社会学が専門の稲永由紀講師(ビジネス系)に聞いた。

(聞き手・井口彩)



稲永由紀講師

多く、彼らの国立大学への要望が「社会的要請になる。その要請は、おそらく経済や生産活動に直接関係する理工系などの分野に向かいがちだ。哲学や文学など「文系」が同委員会や評価されないのは、「文系を学んでも『使えない博士』を生み出すだけだ」と考えられているからだろう。だが、文系を「経済的な利益にならない」というだけで廃止してよいわけではない。「文系は私立大学で学べばよい」という声もあるが、それも違う。哲学や文学などは全ての分野に通じる基礎的な学問。需要が

大学側の知恵次第

低くてもその教育や研究を支えるのは、国の教育の中核を担う国立大学の役割の一つだ。いま、大学関係者の知恵が問われている。国から予算を得ている以上、国立大学が社会の要請に応じ、変化する自然なことだ。だが、大学側がそれをつのみにしても、また反発するだけではない。大学や現場の教員が自身の研究分野が社会とどう関係するのか自覚し、発信することが重要だ。大学側が、社会的要請をふみとった学際的な専攻などを設けることで文系の学問を支えることはできる。古くからのシステムに固執しては、縮小は免れないだろう。

学生の声

文系が廃止や転換を迫られていることについて学生はどう考えているのか。文系・理系の学生に聞いた。

野と、長い期間を要する研究を行う学問分野がある。哲学や物理学の知識が必要な場合もある。

【物3年・男性】

9月2日付の東京新聞朝刊には、文部科学省の「人文社会科学系の廃止」などの提言を受けた「国立大から文系消える?」の記事が掲載された。筑波大学の津崎良典助教(人社会)はこの記事を基に10月、授業で学生に問題提起。哲学の存在意義への考えを求めている。同助教に話を聞いた。



津崎良典助教

される潮流があるのはなぜか。

哲学はすべての学問の基礎 廃止は教育の不等を招く

日本の大学の成立史を振り返ってみると、日本で最初の大学は帝

は、哲学が物事を多面的にみる。哲学はどのような社会的価値判断ができていくか。柔軟に思

9月2日付の東京新聞朝刊には、今回の改革案に対する現場の教員からの激しい反発の声が取り上げられ、「教養は無形の力になる」と改革案の中止を求めている。



改革案を取り上げた9月2日付の東京新聞

「実学でないから援助必要」

文系の科目にも興味があり、言語学や文化人類学の講義を履修したことがあるが、教養として役に立っているの?と学んだ意味がある。大学では、文系・理系という枠組み自体も意味がないといえるほど両者は相互に深く関わっている。例えば、政治学で投票行動を数値化する時は数学を活用する。

貴重な書籍を展示

「鯨絵」や「住吉物語絵巻」など



筑波大所蔵の「鯨絵」(10月28日、中央図書館で)

筑波大学附属図書館主催の企画展「図書館を飛び出した書物たち」が10月20日から11月21日にかけて中央図書館新館1階貴重書展示室で開催されている。

企画展のテーマは「二次利用」。大学図書館が所蔵する書籍の中には、多数の教科書や学術書、雑誌や新聞などに掲載された貴重な資料がある。企画展では、中でも特によく使われる貴重な書籍を一堂に展示している。

例えば、江戸の大震災について鯨をモチーフに描いた浮世絵で、東日本大震災後に教材や書籍などで度々使用された「鯨絵」や、日本史の教科書に掲載されている「解体新書」の扉絵などが並ぶ。また、「住吉物語絵巻」や山崎宗鑑の「新古今和歌集」も10年ぶりに一般公開されている。これらの資料が転載された雑誌や教科書は、会場で閲覧することができる。

展示会を企画した情報管理課の山本淳一副課長は「光が当たると劣化してしまう書物は、普段は貴重書庫の中で厳重に保管している。今回はめったにない機会なので、有名な書物のオリジナルを実際に見てほしい」と語る。

会場を訪れた学生は「鯨絵に興味があつて来た。現物を見るのは初めてなのでうれしい」と話した。11月9日には中央図書館

観客を落語の世界に 漫談や大喜利も

落語研究会の口演会「秋の収穫祭」が10月18日にデイズタウンつくば(つくば市竹園)のイベントホールで行われた。演者と来場者との距離が近い会場で、臨場感のある落語を披露した。

最も会場を沸かせたのは「香車亭いろは」こと菊池ゆとりさん(知識図書1年)の「頭山」という演目。吐き出すのが面倒だからとサクランボを種ごと食べた男の頭から桜の木が生えて



会場を笑いの渦に包んだ「香車亭いろは」こと菊池ゆとりさん(10月18日、デイズタウンつくばで)

に引き込んだ。毎年行っている口演会だが、今年は新入生が例年以上に行く入会したこともあり、その後の漫談や大喜利など、終止活気に包まれる口演となった。

多彩なジャンル熱唱

合唱団むくりの定期コンサートが、10月10日、つくばカピオ(つくば市竹園)で開催された。34回目を迎えた今回は「夢の旅をテーマに、合唱曲だけではなく、Jポップやジャズ映画の挿入歌など、多彩なジャンルの18曲を披露。集まった観客約90人を魅了した。

第一部で歌われた「ADIEMUS」は、音の響きだけを重視した曲で、歌詞に意味はない。しかし、低音で落ち着いた曲調が始まった曲はリコーダーの伴奏と共に力強さを増し、会場は荘厳な雰囲気包まれた。第6部で歌われた「Hid And Seek」はボーカロイド曲を同団が合唱曲に編曲したもの。過ぎ去っていった日々を振り返る曲で、団員たちは想いを込めて歌い切った。

アンコールでは、ミラーボールの演出や観客の手拍に導かれていった。そして、深い考えや調査地として選んだトルコは、美しく、飯もおいしい、何よりそこは単なる調査対象ではなく、ずっと友人としてつきあっていたような人々がいた。そのことは、ここ数年通っている、津波で被災した東北のある小さなまちでもそうだ。

子で会場が盛り上がる中、「こころのあついうちに」「怪獣のパラード」のメドレーを熱唱。このコンサートで引退する3年生の団員3人に花束が贈られた。

コンサートを訪れた筑波大の他の合唱サークルの男性は「選曲や編曲、伴奏など全てを学生のみで行っているの聞き、その完成度に驚かされた」と話した。この公演で引退した豊悠樹元団長(エンス3年)は「今回のコンサートは自分の集大成。とてもうまくいった。今後は後輩の活躍に期待したい」と語った。同団は12月12日にもアルスホール(つくば市吾妻でウインターコンサートを開催予定。(山野辺拓実12面に関連写真)



作曲者の「思い」を奏でる

タリ、三浦章宏(昭和58年度人間学類卒)の独壇場だった。ブルッフのバイオリン協奏曲第1楽章。ト短調の悲哀な調べを三浦のバイオリンが奏でた瞬間、会場の空気が張り詰めた。オーケストラをバックに、三浦は物悲しくも美しい旋律を奏でていく。美しいソナタ

は、良い時間だったが、葛飾公演に向け、本番の経験を生かしてほしい」と語った。指導者の一人

で、新日本フィルハーモニー交響楽団での演奏経験を持つコントラバス奏者・指揮者の中田延亮は、

「楽譜通りに演奏するだけではだめだ。音のキャラクターを考え、『自分にとってこの音はこういう意味だ』と考えながら弾くんだ」と団員に熱く

叫んだ。作曲者が楽譜の音符に込めた思いや意味を一つひとつ模索しながら、団員は練習漬けの1週間を送った。

13日の葛飾公演。練習の成果は、ラフマニノフの交響曲第2番で大きく花開いた。第3楽章のイ長調。ヴィオラの感傷的な音色の後、弦楽器を

バックに、クラリネットのソロが優しく響く。バイオリンの掛け合いやオーボエのソロで徐々に音楽は膨らむ。一度音楽は収束し、再びオーボエやクラリネットのソロを交えつつ、音楽は更に壮大に広がっていく。ラフマニノフが作曲家としての挫折から立ち直り、充実と栄華の中で書き上げたこの交響曲に込めた「思い」を、オーケストラは優しくすくい取り、奏でる。

プロによる洗練された演奏と指揮。学生の豊かな感受性が表れたオーケストラ。美しい音色にあふれる世界を、心ゆくまで堪能した2日間だった。(原啓一郎社会学類4年、写真も)

筑波大学管弦楽団の第76回定期演奏会が、10月4日にノバホール(つくば市吾妻)で、13日につくばシンフォニーホールズモーツァルトホール(東京都葛飾区)で開催され、両日合わせて約1200人が訪れた。H・ペルリオーズ作曲「序曲『リア王』」、M・ブルッフ作曲「バイオリン協奏曲第1番ト長調」、S・ラフマニノフ「交響曲第2番ホ短調」を、約3時間にかわって演奏した。

4日のつくば公演は、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマス



楽譜を見つめ、真剣に練習をする団員たち(2A棟で)

は、良い時間だったが、葛飾公演に向け、本番の経験を生かしてほしい」と語った。指導者の一人

で、新日本フィルハーモニー交響楽団での演奏経験を持つコントラバス奏者・指揮者の中田延亮は、

「楽譜通りに演奏するだけではだめだ。音のキャラクターを考え、『自分にとってこの音はこういう意味だ』と考えながら弾くんだ」と団員に熱く

叫んだ。作曲者が楽譜の音符に込めた思いや意味を一つひとつ模索しながら、団員は練習漬けの1週間を送った。

13日の葛飾公演。練習の成果は、ラフマニノフの交響曲第2番で大きく花開いた。第3楽章のイ長調。ヴィオラの感傷的な音色の後、弦楽器を

バックに、クラリネットのソロが優しく響く。バイオリンの掛け合いやオーボエのソロで徐々に音楽は膨らむ。一度音楽は収束し、再びオーボエやクラリネットのソロを交えつつ、音楽は更に壮大に広がっていく。ラフマニノフが作曲家としての挫折から立ち直り、充実と栄華の中で書き上げたこの交響曲に込めた「思い」を、オーケストラは優しくすくい取り、奏でる。

プロによる洗練された演奏と指揮。学生の豊かな感受性が表れたオーケストラ。美しい音色にあふれる世界を、心ゆくまで堪能した2日間だった。(原啓一郎社会学類4年、写真も)



先に告白しておく、僕にはあまり回帰すべき「原点」と呼べるものがない。というより、原点を語ろうとすると嘘々しくなってしまうのだ。これは、カッコつければ、人生を何かしら単純なストーリーに回収されたくない、という言い方になるかもしれない。でも、よ

なかつた。名古屋という日本一大きな田舎町で弓

道ばかりしていた男子高校生の世界は、それはそれは狭かったのだ。しかし、外国に行ってみると、当てだった国際関係論には成績が悪かったので進学できそうもなかった。そこで僕は賭けに出た。もし文化人類学に希望を出して進学できたら、そ

だ、と語った。よくわからないまま僕はその「現場に出る哲学」にかぶれてしまった。最初のお目当てだった国際関係論には成績が悪かったので進学できそうもなかった。そこで僕は賭けに出た。もし文化人類学に希望を出して進学できたら、そ

人生は偶然の出会い(人との、問題との、時宜との)の連続であり、頑なにならず、その出会いが開く可能性に飛び込んでみればいい。そういうことは、文化人類学から学んだことのように思う。そして連下文化人類学者になったからには、この学問を通じて、ちょっとずつ、世界をより多様に、より生きやすいところにしていく、と思うっている。

木村周平 助教(文化人類学)



人文社会系・助教。東京大学大学院中退。博士(学術)。京都大学特定助教などを経て、2013年から現職。著書に『震災の公共人類学』(世界思想社)など。

人生とは偶然の積み重ね 文化人類学の可能性探す

学に出会った。しかし何に惹かれたのだろうか。教師は学生の前で、コンビニに行ける服装と電車に乗れる服装はどう違うのかとか、よくわからない問いをつぶやいていた。そして文化人類学は、そういう不思議な問いを、異文化でのフィールドワークを通じて考えるん

れを自分の道にしよう。そうでなければ、普通に大学を出て就職しよう。その賭けの結果はどうなったか?ごらんの通りである。僕は運がよかった。師匠と出会い、同期に恵まれ、周囲の人々との関わりから、文化人類学としては当時まだ新しかった災害というテーマ

子で会場が盛り上がる中、「こころのあついうちに」「怪獣のパラード」のメドレーを熱唱。このコンサートで引退する3年生の団員3人に花束が贈られた。

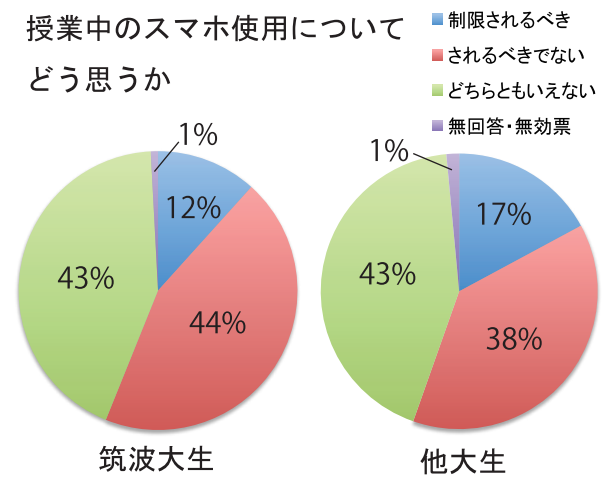
コンサートを訪れた筑波大の他の合唱サークルの男性は「選曲や編曲、伴奏など全てを学生のみで行っているの聞き、その完成度に驚かされた」と話した。この公演で引退した豊悠樹元団長(エンス3年)は「今回のコンサートは自分の集大成。とてもうまくいった。今後は後輩の活躍に期待したい」と語った。同団は12月12日にもアルスホール(つくば市吾妻でウインターコンサートを開催予定。(山野辺拓実12面に関連写真)

人生は偶然の出会い(人との、問題との、時宜との)の連続であり、頑なにならず、その出会いが開く可能性に飛び込んでみればいい。そういうことは、文化人類学から学んだことのように思う。そして連下文化人類学者になったからには、この学問を通じて、ちょっとずつ、世界をより多様に、より生きやすいところにしていく、と思うっている。

授業中のスマホ

筑波大生 44%が「制限すべきでない」

デザイン＝姉崎信（心理学類 2 年）



「マイナビ」（本社＝東京都千代田区）の1月の調査では、大学生のスマートフォン（スマホ）の保有率は9割を越す。学生にとって身近な存在となっているスマホだが、本紙の調査では約9割の学生に授業中のスマホ使用歴があることがわかった。一方で、教員への調査では「スマホの使用で学生が授業に集中しない」などの意見も出ている。アンケート調査や取材をもとに、スマホ使用の実態や、教員や学生の意見などを報告する。（油布知夏＝人文学類、大西美雨、新田萌夏、林健太郎＝社会学類、齋藤優斗＝社会学類）

「授業妨害」認識に差

スマホを使うのは「眠気覚まし」「授業中の暇つぶし」……。本紙のアンケート調査ではそんな声も上がった。学生の本音や使用方法を探った。

■使用の是非

授業中のスマホ使用について、多くの学生は「制限すべきではない」と考えているようだ。「授業中のスマホの使用について、どう思うか」には、筑波大生の44%、他大生の38%が「制限すべきでない」と回答。また「どちらでもない」は筑波、他大ともに43%。また「使用を制限するべき」は筑波大生12%、他大生17%と少なかった。

「制限すべきではない」とした理由について「他人に迷惑をかけなければいい」という意見もあった。

また「使用を制限するべき」の意見では「自分では（スマホ使用の）ブレーキがかけられないので制限してほしい」「堂々と使うのは教員に失礼」などの意見があった。

教員側は授業中の学生のスマホ使用をどう考えているのか。筑波大教員33人へのアンケートではさまざまな意見が噴出した。

■「目撃」

「学生が授業中スマホを使用しているのを目にしたことがあるか」に対しては93%の教員が「ある」と回答。「いいえ」「わからない」の3%を大きく上回った。一方、「（スマホ使用で）授業に支障が出た」と回答したのは21%で、「支障が出たことがない」の57%より大幅に少なかった。

ただ、支障が出た具体例

としては「学生がスマホに集中して資料の配布が滞った」「スマホの呼び出し音や操作音が授業を妨げられた」のほか、「授業に対する意欲が低下する」といった意見もあった。

■「無断撮影」

学生の調査では6割以上が「スマホで板書などを撮影した」と答えたが、教員側も57%が「無断で撮影されたことがある」と回答。「ない」は18%だけだった。その是非に関しては「フットをとりきれない場合は認める」「板書を書き写すことに時間を費やすのは回答を得た。10月中旬から下旬にかけて、筑波大のほか、青山学院大、慶應義塾大、上智大、一橋大、法政大の協力を得て授業中のスマホ使用に関する9個の質問に答えるアンケートを実施。筑波大では360人から、慶應義塾大など他大から269人の回答を得た。

教員に対しては、9月上旬に授業中の学生のスマホ利用に関する設問11個を含むアンケートをウェブ上で実施。筑波大の全学群・学類から3人ずつ任意の教員を抽出し、計69人にアンケートを配布。うち33人の教員から回答を得た。

だが、「撮影するだけではなく実際に手を動かしてほしくない」の意見や、「撮影した内容は個人の利用に限り、勝手に公開したり転用してはいけない」との指摘もあった。

■教員の意見

「学生の授業中のスマホの使用についてどう考えるか」に対しては、7割が「一部使用を認める」「全面的に使用を認めない」と回答した教員には「授業に特定の支障がない」「manaba（学習支援サービス）を利用しているから」「制限するよりも活用する方向で対応した方がよい」などの意見があった。

また、「一部使用を認める」の教員には「わからない用語などを調べる」「電卓として使う」ことなどに限り許可する姿勢が目立った。一方、「全面的に認めない」と回答したある教員は「学生は授業に専念すべきで、スマホ使用は学生の常識を疑う」と答えた。

このほか、自由意見として「スマホを使用している場面を見るのはつらい」「授業と関係ないことでスマホを使用すべきではない」といったものが多かった。また「授業進行の不備についてツイッターなどのSNSに書きこむのではなく、教員に伝えてほしい」のような要望もあった。

一方で「スマホを使い、質問や議論が盛り上がるような授業につなげてほしい」という意見のように、スマホを授業で積極的に活用したい姿勢も見えた。

関係悪化防ぐため使用

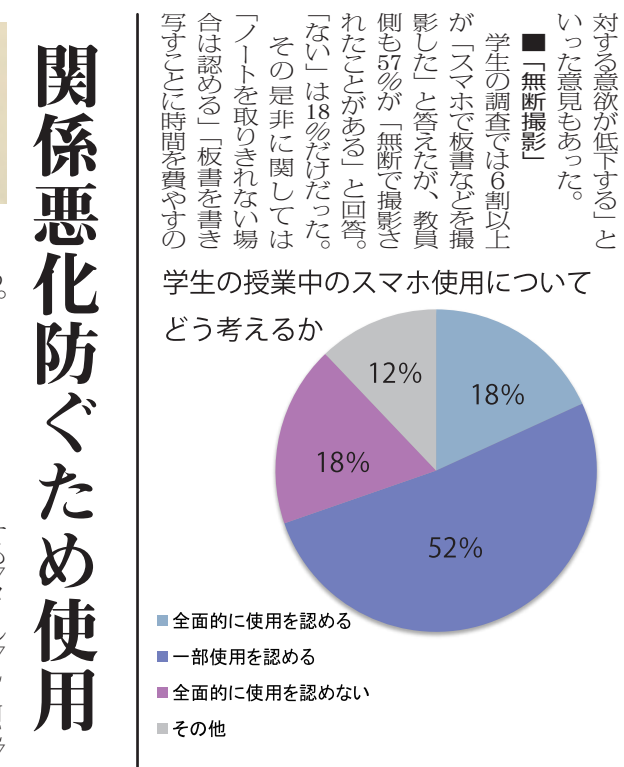
藤桂助教

インターネットの利用が人間の心理に及ぼす影響を研究する藤桂助教（人間系）に授業中のスマホ使用とネット依存との関連について話を聞いた。

同助教は「（自分の）担当授業でもスマホを使用する学生を見かけることがある」と話し、その主な用途はLINEやツイッターなどのSNSではないかという。また同助教によると、SNSの弊害も多いという。近年では一人の相手に対して

学生が授業中でも頻繁にSNSを使う心理について同助教は「友達グループなどの人間関係において『みんなの動きや話題についていきたい』といった関係の維持を求める意識がある」と指摘。『関係を悪くしたくない』『一人だけ取り残されたくない』という関係を失うことへの焦りや不安があるのではないかと分析する。

また同助教によると、SNSの弊害も多いという。近年では一人の相手に対して



制限するよりも活用する方向で対応した方がよい」などの意見があった。

また、「一部使用を認める」の教員には「わからない用語などを調べる」「電卓として使う」ことなどに限り許可する姿勢が目立った。一方、「全面的に認めない」と回答したある教員は「学生は授業に専念すべきで、スマホ使用は学生の常識を疑う」と答えた。

このほか、自由意見として「スマホを使用している場面を見るのはつらい」「授業と関係ないことでスマホを使用すべきではない」といったものが多かった。また「授業進行の不備についてツイッターなどのSNSに書きこむのではなく、教員に伝えてほしい」のような要望もあった。

一方で「スマホを使い、質問や議論が盛り上がるような授業につなげてほしい」という意見のように、スマホを授業で積極的に活用したい姿勢も見えた。

教員の態度と相関関係

安東恵美さん（教育4年）

安東さんは7月から8月上旬にかけて39人に対し授業中のスマホ使用について調査している。また、教員に対しては「下を向いて話し続けない」という姿勢が感じられないように、授業中にSNSを利用することで、学習効果を高めるスマホの活用方法を考えたい」と語った。

安東さんは「学生の意見を聞きながら、今後は教育方法を考えたい」と語った。

制限するよりも活用する方向で対応した方がよい」などの意見があった。

また、「一部使用を認める」の教員には「わからない用語などを調べる」「電卓として使う」ことなどに限り許可する姿勢が目立った。一方、「全面的に認めない」と回答したある教員は「学生は授業に専念すべきで、スマホ使用は学生の常識を疑う」と答えた。

このほか、自由意見として「スマホを使用している場面を見るのはつらい」「授業と関係ないことでスマホを使用すべきではない」といったものが多かった。また「授業進行の不備についてツイッターなどのSNSに書きこむのではなく、教員に伝えてほしい」のような要望もあった。

一方で「スマホを使い、質問や議論が盛り上がるような授業につなげてほしい」という意見のように、スマホを授業で積極的に活用したい姿勢も見えた。

スマホで出席確認「manaba」使用

教員が授業でスマホを活用する例もある。4月からスマホを使って出席確認を行っている桑原朋彦准教授（生環系）に具体的な方法やメリットを聞いた。

同准教授は①学生がスマホのカメラでQRコードを読み取る、もしくはURLを直接入力して学習支援サービス「manaba」にアクセスし、ネット上で出席登録する方法②紙の出席票に名前や学籍番号を記入する方法の2種類で出席を取っている。どちらか一方でも確認できれば、出席点を与えているという。

実際に同准教授が担当する「微生物学Ⅱ」の授業を見学すると、QRコードを読み込めず四苦八苦していた学生もいたが、URLを入力することで全員が出席を登録できていた。

同准教授は「紙の出席票とスマホの両方で出席を取ることができるといい。また、スマホを使った出席確認ではmanabaを通じて、学生自身で自分の出席が確実に登録できたことを確認できるメリットがあるという。」

また同准教授は「manaba入力時間には、授業とは別のことに集中するため、頭をリフレッシュさせることができる」と語る。

同准教授は紙の出席票とスマホの両方で出席を取ることについて「今はまだ試験段階。最終的にはどちらか一つに絞りたい」としている。



「微生物学Ⅱ」でスマホを使い出席確認する様子（10月20日、2B棟）＝新田萌夏撮影

「マナー無視する学生増えた」

他人に迷惑な行為は禁止

授業中の学生のスマホ使用の授業でスマホの利用を禁
用にあまり賛成しないとい
う海後宗男准教授(人社会系)
「無断で携帯電話等、授
業に關係のない電子機器を
使用しない」授業中に私
語をしない」……10年前か
ら海後准教授は、初回の授
業で学生にこれらの約束を
交わしている。
ただ、海後准教授は全て
は誰かがわきまえる「マ
ナー」の範囲だと思い、特
別に約束をすることはな
かった。だが、最近ではマ
ナーを無視し、好き勝手に
振る舞う学生が増えてき
たと同准教授は語る。



授業中のスマホ使用について語る海後准教授
(10月15日、共同利用棟で) 〓 油布知夏撮影

理由には▽植物が光合成
に必要とする特定の波長
の光を照射できる▽熱放
射が少なく植物にダメージ
を与えない▽長寿命
……など、植物栽培に適
した特徴を備えているか
らだ。

LEDで植物の成長促進

効率良い栽培技術確立へ

今年10月、日本人の
3研究者が青色発光ダイ
オード(LED)の発明
でノーベル物理学賞を受
賞した。LEDは消費電
力の少ない照明やブルー
レイディスクに利用さ
れ、我々の生活を支えて
いる。その一つが農学分
野だ。LEDを用いて光
の当て方による植物の育
ち方の変化を研究する福
田直也准教授(生環系)
に聞いた。

福田准教授によると、
人間は目で光の色を識別
できるが、植物も光の色
を見分けることができ、
周囲の環境を知る手がか
りになっている。同准教授
はシンギクやレタスに

形態が変化することか
わかった。
この性質を利用するこ
とで、見栄えの良いシン
ギクやレタスなどの葉
菜類を効率的に栽培でき
るようになる可能性があ
るという。

「単位さえ取得
できれば、授業中は何をし
ていても許されると考える
学生に對し『マナー』を常
識」を唱えても理解して
もらえない。だからルール
を作った(海後准教授)。
ここまで厳しく対応する
のは学生のためでもある。

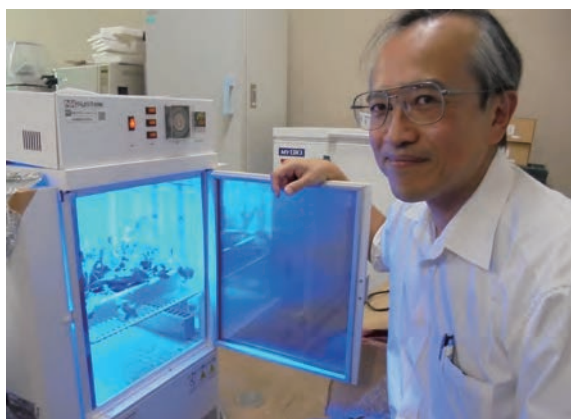
真摯に議論を



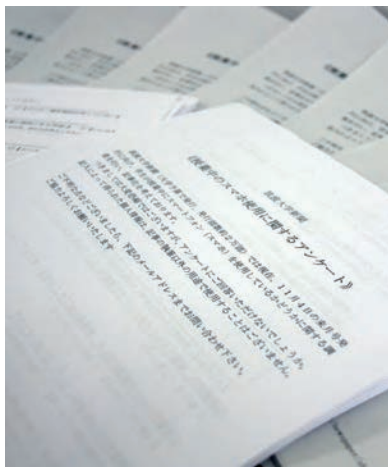
学生の授業中のスマホ使
用は許されるのか……。今
回のアンケートでは、この
問いに対する賛否両論が教
員、学生から噴出した。全
面禁止。一部許可。そして
一部の学生の「大学生なの
だから制限はいらない」と
いう意見……。だが一つだ
け確実なのは、これまで学
生、教員がこの問題につ
いて真摯に議論していな
かったという現実だ。早
する方法を模索してい
る。

しかし、実用化には
まだ課題もある。光の当
て方を工夫することで成
長速度を速くしすぎる
と、植物が必要とするカ
ルシウムなどの栄養素を
地中から吸い上げるのが
間に合わず、葉の先が枯
れてしまうことがある。

同准教授は、植物に人工
風を当てることで蒸散速
度を上げ、栄養素を根か
ら地上部の末端まで吸い
上げやすくさせるなど解
決策を検討中だ。
「これから3〜4年の
間に課題を改善し、国外
でも利用されるような栽
培技術にしたい」と同准



LEDの青色の光の中で育つレタスと福田直也准教授(10月24日、農林技術センターで)



今回配布・集計したアンケート

れず、ある授業では全面
禁止になっている……。
これは混乱を招く。
今回のアンケートで浮
き彫りになったことは二
つある。一つは、問題に
ついてほとんどの人が
明確な意見を持ってい
ることだ。だがもう一つ
は、教員、学生の意思疎
通が欠けていることだ。

オオカマキリ



撮影地=つくばセンター周辺

筑波鑑
自然図鑑
カマキリは私が最も好き
な虫の一つだ。凶暴で、鎌
や牙で攻撃されるの痛い
が、体の動きや大きな眼
表情に愛嬌がある。

身近に見られるカマキリ
は、オオカマキリ、チョウ
センカマキリ、ハナビロカ
マキリ、コカマキリなど。
この中でも、オオカマキリ
とチョウセンカマキリは見
分けが付きにくい。鎌の付
け根の色や、後羽の模様な
どを見て、判別を行う。
つくばセンター近くで白
い素敵な先輩方がたくさ
んいらっしゃいます。こ
れは筑波大の一つの文化
であると思っています。こ
の文化がずっと継
承されていくように、私
もサービスを通して後輩
に少しでも価値を届けたい
と思っています。今後も
筑波大から世界に羽ば
たいていく学生さんの手
伝いを一人でも多くした
い思い、日々仕事に励ん
でいます。

最後に、筑波大で出会
った縁を大事にしてほし
いと思っています。私は
ここで3年間ルームシェ
アをするようになった友
人や、現在一緒に会社を
やっている友人と出会い
ました。大学での出会い
は今も分らないかも知
れませんが、一生ものの
出会いです。一つ一つの
出会いを大切にしてくだ
さい。(平成23年度体育
専門学群卒)



クロノファクトリー
鈴木良弥さん

2007年に体育専門
学群に入学しました。実
は、元々体育学を学びた
いとは思っていません
た。自分のやりたいこ
とや目標に関して思い悩
む日々でした。

そんな中、3年生の時
に友人、先輩と学生団体
を立ち上げ、200人規模
の交流イベントを開催
したり、学園祭に女優の
加藤ローサさんを招いて
トークショーを開催した
り、つくばピオホール

現在、社会人になって
3年目となり、学生団体
を立ち上げた親友と共に
株式会社クロノファクト
リーという会社を営んで
います。筑波大生向けの
サービスを中心に展開を
しており、現在も多くの
筑波大生と関わらせてい
ただいています。サービ
スの内容としては、筑波
大生専門アパート情報

最後に、筑波大で出会
った縁を大事にしてほし
いと思っています。私は
ここで3年間ルームシェ
アをするようになった友
人や、現在一緒に会社を
やっている友人と出会い
ました。大学での出会い
は今も分らないかも知
れませんが、一生ものの
出会いです。一つ一つの
出会いを大切にしてくだ
さい。(平成23年度体育
専門学群卒)

筑波での出会いを大切に

最終戦敗れ優勝逃す

首都大学野球1部リーグ

【バティングパレス相対スタジアムひらつか(神奈川県平塚市)で鈴木拓也(人文科学3年、写真も)8チームが2回戦総当たりで戦う首都大学秋季リーグの最終戦が10月19日に行われた。筑波大は勝てば優勝という大一番で帝京大に1-6で敗れ、10勝3敗1分けで東海大、帝京大に次ぐ3位に終わったが、明治神宮大会の出場権をかけた関東地区大学選手権の出場権を6年ぶりに獲得した。2位の帝京大とは勝率で並んだが、春季リーグの順位が帝京大よりも下だったため、筑波大が3位となった。

リーグ3位で終了

得意の接戦に持ち込み、初回、先発の西島隆成(体育専3年)は制球が定まらず、試合は終始、帝京大に二死、二塁から中越え適



初回1死一、二塁、先制の適時打を浴びる先発の西島(10月19日、帝京大戦で)

時三塁打を浴びるなど、一挙に3点を先行される。西島は四回にさらに1点を失い、この回途中で降板。筑波大は流れを返えようと細かい継投策に出たが、帝京大の攻撃を止められなかった。



三回、先頭打者の板崎が左前打を放つ(10月19日、帝京大戦で)

筑波大打線は三回、先頭の板崎直人(同3年)が左前打で出塁。だが、続く國井伸二朗(同3年)が犠打失敗で併殺に終わるなど、拙攻が目立った。6点差で迎えた九回には、二死満塁のチャンスを作るが、押し出しの四球で1点を返すのが精いっぱいだった。

「リーグ戦最後の試合だ。いつも通りやろう」。試合前、川村卓監督(体育系・准教授)は選手たちに平常心で臨むことを強調した。だが試合終了後、初回についで「いきなり3失点は厳しい。せめて1点に抑えてほしかった」と話し、「いつもと比べると選手たちの動きが固かった。6位だった春季リーグから成長できたと思うが、優勝を逃したのは悔しい」と語った。

◇明治神宮大会の出場権をかけた関東地区大学選手権の初戦が10月27日に横浜スタジアム(横浜市中区)で行われた。首都大学連盟第3代表となった筑波大は関甲新学生連盟第1代表の上武大と対戦、1-2で惜敗した。

筑波大は二回、無死満塁のチャンスを作ると、内野ゴロの間に1点を先制。だが、八回に先発投手の西島隆成(体育専3年)が二死一、三塁から右中間に2点適時三塁打を浴び、逆転された。九回は三者凡退で終わり、1-2で敗れた。

逆転勝ちで3位入賞

秋季リーグ

後半流れつかむ



【青山学院記念館(東京都渋谷区)で林健太郎(社会学科2年、写真も)9月から行われていた秋季関東大学1部リーグの最終戦が10月12日に行われ、女子は青山学院大に逆転勝ちし、5勝5敗で8チーム中3位に入賞。12月に行われる全日本インカレに向けて弾み

をつける結果となった。また、秋谷沙也加(体育専1年)がスパイク賞を受賞した。

第3セット前半は、相手の素早い攻撃の前にリードを許すなど、劣勢の場面も多かった。だが徐々に流れをつかみ、後半は相手の攻撃の多くを防ぎ、28-26で第3セットを奪取した。

続く第4、5セットは、全日本代表の井上愛里沙(同1年)を中心に次々と



スパイク賞を受賞した秋谷沙也加(10月12日、青山学院大戦で)

得点を決め、それぞれ25-14、15-7と大差をつけて逆転勝ちを決めた。

◇中国監督は「秋季リーグは攻守の切り替えが上手くいかず苦戦した。だが最終戦では第3セット以降、そういった切り替えができ、勝つことができました。この調子で全日本インカレの優勝に向けて練習していきたい」と話した。

記者の目

筑波大は2006年秋以来の首都大学リーグ優勝まであと一歩だった。チームはリーグ序盤から順調に白星を重ね、首位で最終戦を迎えた。だが、最後は帝京大に敗れ、10勝3敗1分けで最終順位は3位。それでも春の6位から大きく順位を上げ、6年ぶりに関東地区大学選手権に出場するなど躍進のシーズンだった。

投手陣がチーム支える

得るまで、最大で相手チームと3度戦わなければならない。だが今春から同リーグは勝率を争う一勝率制に参入。試合数が少なくなった。川村卓監督(体育系・准教授)は「春は(勝率制が初めてで)手探りの戦いだったが、ようやく戦い方が分かってきた」と語る。勝率制の戦い方では、投手陣の活躍が重要なカギになる。これについて川村監督は「勝ち点制だと絶対的なエースのいるチームは、1戦目と3戦目をエースで勝てる。だが、これからの順位決定方法は、相手チームに先に勝った方が勝ち点を得る「勝ち点制」を取っていた。この場合、勝ち点を有利にする」と説明する。

特徴が重要なカギになる。これについて川村監督は「勝ち点制だと絶対的なエースのいるチームは、1戦目と3戦目をエースで勝てる。だが、これからの順位決定方法は、相手チームに先に勝った方が勝ち点を得る「勝ち点制」を取っていた。この場合、勝ち点を有利にする」と説明する。



数々のタイトルを持つが、ボートを始めたのは高校生の時。中学ではバレー部に所属していたが、持ち前の体力で、学内のマラソン大会では陸

に水面を進むボート部の練習だった。水面を滑るように進むボートと、一心不乱にオールを漕ぐ部員の姿に「(ボートを)やってみよう」と強く心引かれ、入部を即決した。その後は「勝ちたい」一心で練習に没頭。高2の1月には早くも日本代表の選考合宿に招集された。日本代表になれるのは招集された40人中6人。同月の最初の選考で12人の枠に残ると、6月の代表選考に向けて地元ボート協会や友人などの期待は一気に高まった。

目標は、来年7月にイタリアで開催されるU-23世界選手権でのメダル獲得。「まだまだ力不足だが、今シーズンの結果を見ると、練習の方向性は間違っていない。メダルを目指して頑張りたい」。周囲の期待を乗せた小原のボートは、世界の大舞台に力強く漕ぎ出している。(田中開二教育学科1年、写真は漕艇部提供)



アジアジュニア選手権優勝 漕艇部期待の新人 小原有賀(体育専1年)

上部を差し置いて常に上位に入賞していた。だが「バレーもマラソンも」他人からやらされるまま

そんな中で地元愛媛県小原のボートの強豪校、松山東高に進学。そこで目にしたのは、沈む夕日を背

世界でのメダル獲得目指す

の座を勝ち取った。8月の世界選手権は19チーム中14位に終わったが、世界の強豪のレベルを知

未登録車の撤去開始

ICタグ1年 値上げも視野に

迷惑駐輪や放置自転車をなくすことを目的に、ICタグを用いた自転車・バイク登録制度が運用されてから1年になる。今年度から未登録自転車などの撤去が始まったが、当初予定していた不適切な駐輪をした学生に対するメールでの警告はまだ行われておらず、学内は今学期も多くの自転車であふれている。当初は無料配布だったICタグも今年は実費を徴収。来年以降はその値上げの可能性が浮上するなど、新たな問題も浮き彫りとなってきた。(鈴木拓也)人文学類3年

■1200台廃棄処分

筑波大は今年4〜10月までに未登録自転車など計約2000台を各エリアの撤去場所に移動、うち一定期間が過ぎた約1200台を廃棄処分にした。学生生活課によると、第一三エリアでは主に未登録自転車を各114台、35台撤去し、総合研究棟A周辺では駐輪スペース外にあった約50台を撤去。同課では「今後も撤去、廃棄作業を続ける」としている。

■計画通りに進まず
ただ、現在は人員不足から学内の撤去作業は不定期に行っている。また制度開始当初は、登録したにもかかわらず不適切な駐輪をした学生に対してメールで警告しない」と話している。

■ICタグの値上げも
一方、昨年から大学の一部で浮上したICタグの値上げ案について学生生活課は「今のところ決まってい

た。同課によると、自転車・バイク登録制度の運営費は主に人件費など毎年約450万円かかる。一方で今年度、同制度に充てられた予算は約300万円。昨年度の約1400万円から大幅に減額。さらに来年度は予算がゼロの可能性もある。また今年度の新入生

から徴収したICタグ代は計約300万円。このままでは将来的なICタグの値上げは避けられない(同課)という。

ICタグは現在、自転車、バイクが盗まれた場合やICタグ自体が壊れた場合は無料で再配布している。だが、自転車を買い替えてICタグを交換する場合やICタグをなくした場合1000円を徴収。大学は今年度から学内で自転車の利用を希望する新入生から、入学手続きの際にICタグ代として1000円を徴収している。

県が宿舍を無償貸出 入居者の制作活動支援

茨城県は、つくば市松代の公務員宿舎を「いばらきクリエイティブハウス」として、個人やグループ、法人向けに12月から無償で貸し出す。アニメやゲーム、スマートフォンアプリなどのコンテンツを制作する若者の活動拠点とし、県のコンテンツ産業の育成を狙う。



有する空き家となっていた公務員宿舎2棟4戸(築34年)。(住居)としてではなく、制作活動の進捗状況を把握する。また、入居者支援のため、制作に必要な技術を持った人材の紹介を考えている。管理運営委託者のつくばインキュベーションラボ提供

敷金、駐車場代が無料だが水道代などの他の費用は入居者が負担する。入居期間は最長で2017年3月までの予定だ。

入居後は支援担当者との面談を定期的に実施し、制作活動の進捗状況を把握する。また、入居者支援のため、制作に必要な技術を持った人材の紹介を考えている。管理運営委託者のつくばインキュベーションラボ提供

受付締切は11月20日まで。個人、団体共に、所定の用紙をホームページからダウンロードし、郵送で申し込む。書類選考の後、11月下旬に面接を行い、12月中旬から入居を開始する。(原啓一郎)

「結」2号16年に打ち上げ

「きぼう」から放出



会議で進捗を報告しあうメンバーたち(10月11日、総合研究棟Bの開発室で)

筑波大学生が製作する小型人工衛星「結」の2号機「ITF-2」が、2016年9月に打ち上げられることが決まった。宇宙航空研究開発機構(JAXA)のロケットに相乗りし国際宇宙ステーション(ISS)へ打ち上げられた後、ISSの日本実験棟「きぼう」から宇宙に放出される予定だ。開発チームは、今年2月に打ち上げられたが衛星からの電波を受信できずに消滅した1号機の製作経験を生かし、作業を進めている。

2号機は1辺約10cmの立方体で重さ約1.2kgと小さく、重さは1号機と同じだが、1号機の故障原因とみられる電気回路のパーツなど内部の構造を改良するという。だが、1号機が達成できなかった「子どもや一般の人にも手作りの簡易アンテナで電波を受信し

てもらう」という目的は変わらない。ただ、1号機では衛星の温度や電池の残量をモジュール信号で送信する予定だったが、2号機ではそれに加えて「モジュール信号よりも受信が簡単」(プロジェクト責任者・亀田敏弘准教授)という合意で、音声でも情報を発信する。

チーム代表の太塚健斗さん(エシス4年)は「1号機を開発した時よりも、チームの人数が多いため、メンバーの能力を引き出せるよう努めた。2号機は絶対に成功させたい」と抱負を語った。

「結」の1号機は11年3月に開発を開始。13年12月に完成し、今年2月にJAXAのロケットの相乗り衛星として打ち上げられたが、内部に何らかの不具合が生じて衛星からの電波を受信できなかった。6月末に大気圏に突入し消滅した。(井口彩、写真も)

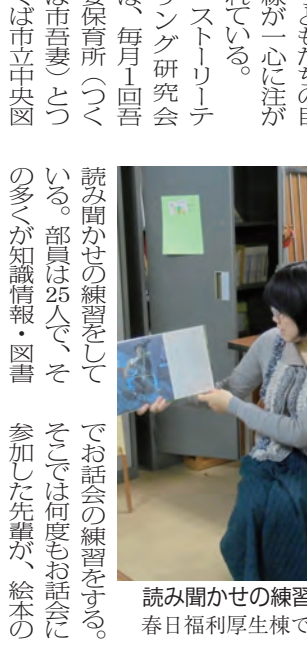


「結」の1号機は11年3月に開発を開始。13年12月に完成し、今年2月にJAXAのロケットの相乗り衛星として打ち上げられたが、内部に何らかの不具合が生じて衛星からの電波を受信できなかった。6月末に大気圏に突入し消滅した。(井口彩、写真も)

「結」の1号機は11年3月に開発を開始。13年12月に完成し、今年2月にJAXAのロケットの相乗り衛星として打ち上げられたが、内部に何らかの不具合が生じて衛星からの電波を受信できなかった。6月末に大気圏に突入し消滅した。(井口彩、写真も)

ストーリーテリング研究会

子どもに思い出の一冊を



読み聞かせの練習をするメンバー(10月26日、春日福利厚生棟で)

「むかしむかし、あるところに……」。ある日曜日の昼下がり、図書館の一室に子どもたちが集まっていた。お目当ては絵本の「お話会」。絵本を読み聞かせるのは、ストーリーテリング研究会だ。彼らが読む絵本に、子どもたちの視線が一心に注がれている。

ストーリーテリング研究会は、毎月1回吾妻保育所(つくば市吾妻)とつくば市立中央図書館で、地域の子どもも向うけに絵本の「お話会」を行っている。絵本だけでなく、紙芝居の読み聞かせも行っている。普段は週に1回ミーティングを行い、まで読み込み、会員の前

持ち方や言葉の抑揚、読む速度などについて、聞き手の目線に立って丁寧にアドバイスをする。また「登場人物はこのシーンではどんな気持ちなのだろうか」と、全員で頭を悩ませ、読み方を模索することもしばしばだ。

練習の成果を発表する場が、保育所や図書館でのお話会だ。図書館のお話会には、毎回親子合わせて約15人が訪れる。お話会が始まると、子どもたちはじっと絵本を見つめ、話し手の声に耳を傾ける。話し手は絵本を読む最中も、子どもたちの気配りを忘れない。お話会では手遊びを交えながら約30分で3冊の絵本を読むが、途中で子どもたちが飽きてしまうことも。そんな時は、ページをめくる速さをわざと遅くしたりして、子どもた

交通法の対象になっている」と説明。過去に自転車事故で相手に後遺症を負わせ、多額の賠償金を請求された例を挙げ「事故を起こしてしまえば人生が一変する可能性もある」と話した。

その後のディスカッションでは、全代会の南山歩さん(応理3年)が「外国語センターの近くのペデストリアンデッキでは、歩行者と自転車と同じ道を通っていて危険だ」と指摘。歩道を整備し、歩行者には必ず歩道を通ってもらうような取り組みを提案した。(栗山菜帆子)

「自転車の環境シンポジウム 交通マナー講演」
学生と意見交わす
学生生活課が主催する「自転車環境シンポジウム」が10月8日に筑波大学1D棟で開催され、つくば中央署の交通課長や学生生活課の職員らが交通マナーや学内の自転車問題について講演した。また、学生と教職員が自転車マナー向上に向けて意見を交わした。

講演では、同署の小高正歩道を通ってもらうような取り組みを提案した。(栗山菜帆子)

Who's Who?

ヒマラヤ山脈のマンセイル峰 世界初の登頂成功者

中村 真理子 さん (人文4年)



マンセイル峰にアタックする中村さん (9月29日、キャンプ2とマンセイル峰の間の氷河で) =本人提供

今年9月29日にヒマラヤ山脈の未踏峰・マンセイル峰(ネパール・標高6242m)の登頂に世界で初めて成功した、「日本山岳会学生部女子ムスタン登山隊」のメンバーの一人。足を一歩一歩進めるごとに、人生で初めて

の標高を目指すことに感動を覚えた」と登山を振り返る。

中村さんにとって、今回が初めての海外登山。「禁断の王国」と呼ばれる

奥ヒマラヤ・ムスタンのマンセイル峰。登頂には数々の困難が待ち受けて

いた。登山前、現地の天気予報では山の天気は大きく荒れることはない」とされていたが、その予報は外れ、激しい降雪に見舞われた。さらに、登山隊のメンバーの一人が体調を崩し、登山の断念を余儀なくされた。登山中は深さ数メートルのクレバス(氷河の巨大な裂け目)にも遭遇し、その上を通過することも。数々の困難にぶつかったが、「せっかくの登山だから楽しまなくてはと思った」と、苦境を乗り切った表情で語る。

今や数千メートル級の山々を登るほどだが、意外にも中学・高校時代は美術部に所属するなど、アウトドアとは真逆の生活を送っていた。当時は日本国内の山に登った経験すらなく、富士山など有名な山しか知らなかった。しかし高校時代、エベレストなど世界最高峰の山々を登った経験を持つ校長先生と出会い、徐々に登山に興味を持ち始めた。全校集会で校長先生の登山の体験談を聞くうちに、少しずつ「世界中を

何事も楽しむチャレンジ精神
「登山で自分と向き合える」

旅してみたい。世界中の山を登ってみたい」と思うようになった。

そんな思いから、筑波大入学直後にワンダーフォーゲルクラブに入部。初めて登った山は東京都奥多摩の雲取山(2017年)。「初めて登った時はとても苦しく、登るだけで精一杯だったが、今は後輩を引率しながら登るまでになった。1年生のこと比べて、登山に余裕が生まれたと感じる」と自身の成長をかみしめる。美術部で培った画力を生かして、登山の際はたびたび山の風景をスケッチする。「旧友たちが、海外登山に挑戦する今の私の姿を見たとき、驚くのでは」とほほ笑む。

大学では宗教学を専攻する。「ただ単に登山するのではなく、現地の文化や生活に触れるのも面白い」と興味の幅も広い。マンセイル登山のために訪れたムスタン地方は、チベット仏教の影響を強く受け、その文化が残った数少ない地域の一つだ。「ネパールを散策している時、マニ石(仏教典が刻ま

れた岩や石)が道端に並んでいるのを見た」と語る。また、登山隊の他のメンバーが敬遠するような、現地の食材を食べたと異文化との交流についても話す。登山以外でのチャレンジ精神も旺盛だ。

「登山技術はまだ未熟。経験を積んで、さらに磨きをかけたい」と高い向上心を内に秘める。大学卒業後は国内の山小屋で働いて資金を蓄え、将来はカナダで本格的な登山技術を学びたいという。「今回の登山では良い経験ができた。新しい山に挑戦すると全く異なる経験が得られる」と登山への意欲を見せる。

「山に登ることで自分と向き合うことができる。山は自分の足りないところを教えてくれる」。さらに高みを目指す彼女を待つ山は、まだまだ無数にある。峰々の頂を吹く風は、今日も彼女を山へと誘う。

(小野恵司II社会学類1年)

編集後記

筑波大学の今後のプランニング戦略を考える「広報戦略室」の会議に参加する機会がありました。「筑波大の強みは何なのか?」……話し合いの中で最も多くの票を集めたのが「学際性」でした▼幅広い学問領域をカバーした学群・学類。専門分野を超えて、他学類の講義を履修できるカリキュラム。これに惹かれて入学を決めた学生も多いのではないのでしょうか▼しかし、強みと弱みは表裏一体です。2面のインタビュー記事で永田恭介学長が指摘するように、学生が筑波大の特徴である「学際性」を最大限に活用した上で、それを研究成果に結びつけられないのが現実です。▼特別招聘教授に就任した下村脩氏は、化学と生物を融合させた、分野横断的な研究でノーベル賞を受賞しました。学際的な視点で成果を生んだこの好例に、学ぶことは多い気がします。(編集長 平嶋健人II社会学類3年)

次号は

12月8日(月)

発行予定です

下田臨海実験センター



高性能の新型海洋調査船「つくばII」(10月24日、静岡県下田市で) =平嶋健人撮影

2面へ

合唱団むくどり 定期コンサート



多彩なジャンルの曲を披露し、観客を魅了した(10月10日、つくばカピオで) =合唱団むくどり提供

5面へ

関東大学リーグ



先制点を挙げた中野嘉大(10月26日、駒澤大戦で) =森脇慎撮影

8面へ

秋季関東大学リーグ



得点を決め喜ぶ筑波大選手(10月12日、青山学院大戦で) =林健太郎撮影

9面へ

学内総合

学芸

スポーツ

スポーツ